

NEWSLETTER

JUN 2025

ISSUES #2

当社の旬な話題をご紹介します
大気社ニュースレター

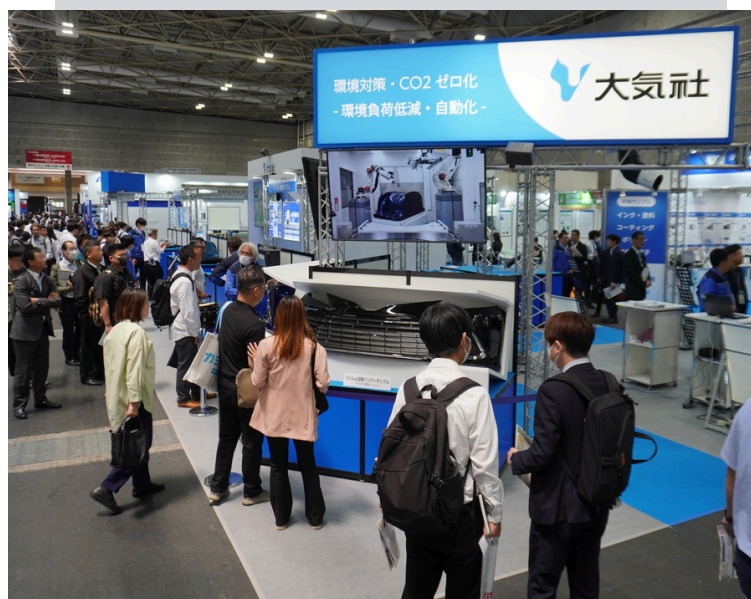
発行元：株式会社大気社 経営企画部
広報・サステナビリティ推進課
連絡先：mailmast@taikisha.co.jp

“環境を塗り替える”技術力を発信 コーティングジャパン2025に出展

2025年5月14日～16日にインテックス大阪（大阪市）で開催された業界向け展示会「第8回 [大阪] 塗料・塗装設備展（コーティングジャパン2025）」に出展しました。

「技術でモノづくり環境を塗り替える！」をテーマに、CO₂排出削減に貢献する独自のドライ加飾や給気風量を最大50%削減する少風量ブースなどを紹介。環境負荷の低減と省エネへの取り組みを訴求しました。

会期中は多くのお客さまにご来場いただき、当社の技術に対する関心の高さを実感する機会となりました。いただいたご意見を今後の製品開発・提案活動に活かしてまいります。



多くの来場者が足を止め、終日盛況となった大気社ブース
環境対応技術への注目の高さがうかがえた

なぜ塗装工程の見直しが必要なのか？車体塗装とは

クルマの車体塗装には、美観や防錆性能を高めるために塗料を何層にも重ね塗りし、各工程で乾燥を繰り返す高度な技術が必要です。

しかし、カーボンニュートラルの実現に向けては、従来の塗装方法における大量のエネルギー消費やCO₂排出、VOC（揮発性有機化合物）の発生といった環境負荷が課題とされており、塗装プロセスそのものの抜本的な見直しと、持続可能な新たな技術への転換が求められています。

カーボンニュートラル実現へ一歩前進 ドライ加飾が描く新たなものづくり

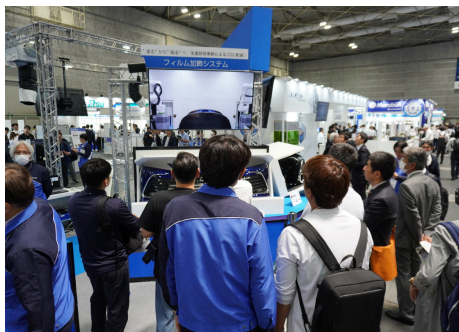
出展技術の中でも来場者の注目を集めたのが、独自に開発したドライ加飾です。塗料を使用せず、意匠性の高いフィルムを真空吸引と加熱によって自動車の外板に装着することで、塗装では再現できない質感やデザインを実現します。さらに、塗装・乾燥工程を省くことで、自動車製造時の設備によるCO₂排出量を75%削減。排水・排気設備が不要になるなど、環境負荷の大幅な低減にも貢献します。加えて、従来のウェット塗装に必要なブース、空調、乾燥炉、排水設備、塗料循環設備



注目のドライ加飾によるサンプル品

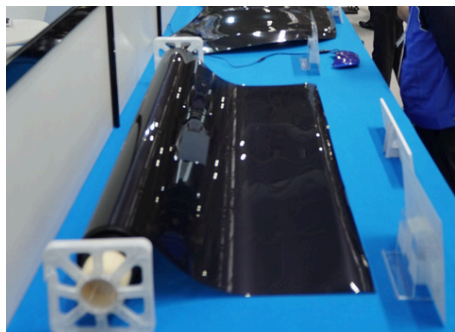
といった大型設備が不要なため、設備コストや設置スペースの削減も可能です。カーボンニュートラルを目指す自動車メーカーからの期待も高く、次世代の塗装代替技術として大きな関心を集めました。

主な展示内容



ドライ加飾のデモ映像

多くの来場者が注目。説明員も対応に追われる盛況ぶりを見せた



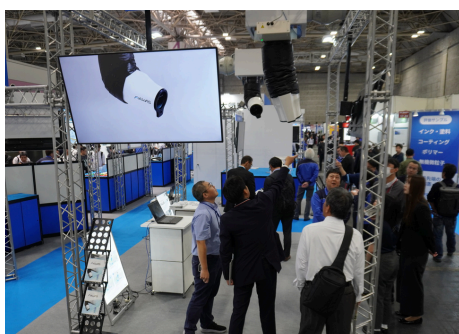
ドライ加飾に欠かせない加飾フィルム

材料メーカーとの連携が技術実現の鍵を握る



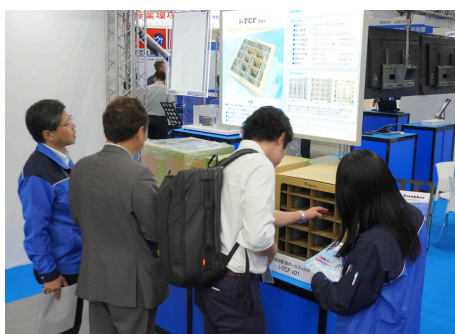
ドライ加飾の意匠サンプル

従来の塗装では難しい鮮やかな色彩と質感が注目を集めた



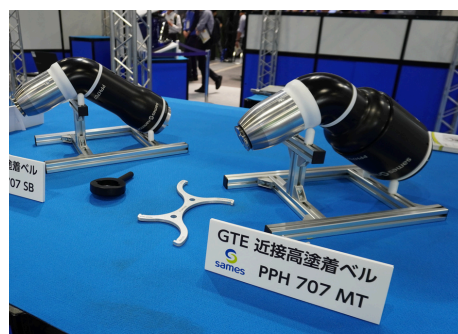
FOLLOAS (人追従吹出口システム)

工場などでの暑熱対策として、作業者の動きに追従し、連続して冷風を当てる



段ボールフィルタ (乾式フィルタ)

オーバーミストを効果的に除塵し、環境負荷の低減に寄与



高塗着ベルGTE

高塗着効率により塗料ロスとVOC排出を抑制。省エネ・作業性・安全性にも貢献

責任者が語る ドライ加飾の意義とは？



東 義雄

自動化ビジネス統括部 ドライ加飾事業推進部長

「早期の実用化を目指して、自動車メーカー、材料メーカーと三位一体で取り組んでいます」

— ドライ加飾プロセスの技術的な優位性について教えてください。

ドライ加飾は、クルマの車体に塗料を使わずフィルムで意匠を施す技術で、従来のウェット塗装では難しかった色彩や質感の表現が可能になります。また、乾燥炉や塗料循環設備が不要なため、工程の省略による省エネ性や設備コストの削減にもつながります。意匠性と環境性能を両立できる点が、この技術の大きな特長です。

— ドライ加飾プロセスに取り組む背景について教えてください。

きっかけは、お客さまから「従来の塗装方法ではカーボンニュートラルの実現が難しい」という声をいた

だいたことでした。エネルギー負荷の大きい塗装工程を抜本的に見直す必要がある中で、省エネ性と新しい加飾価値を同時に提供できるドライ加飾に着目し、開発に取り組んできました。

— この取り組みを通じて、どのような役割を果たしたいと考えていますか？

現在はデモラインで稼働を進めており、自動車メーカーとの成形テストを通じて技術の検証を重ねています。今後は自動車および材料メーカーと共に課題を解決しながら精度・安定性をさらに高め、量産ラインへの導入を実現することが、当事業部の重要な役割だと考えています。